草の芽句会だより

NO,163
22 ,3,3

風冷ゆる小鳥の尾のふるえおり　範子
白梅に陽ざせば光り紅は紅

パンジーの植え替え進む城広場　純子
人力車の赤い毛氈城の春

クレーン車の伸びたる先や春の城　禮子
春ぬくし城の広場の人力車

水仙の咲き継ぐ狭庭空青く　剋子
下萌ゆる影を重ねて城の木々

裏庭の枝の先まで梅の花　貞子
小走りに犬と散歩や春うらら

ものの芽に小さき喜び今朝の庭　文子
足跡はいつもの三毛か春の泥

菱餅の紅白緑風光る　節子
幼らの声賑やかや木の芽時

春空に垣根のみどりくっきりと　芳子
鳥も飛び虫も這い出るあたたかし

出席者　吉崎　森　馬場　小山
投句者　川原　大黒　氏家　小林

今日は雛祭り。城山の売店には色紙のお雛様が。青空が広がる大手門広場には赤い座布団の人力車がスタンバイ。花壇では賑やかにパンジーの植替えが始まっている。赤や黄色の可愛い花が辺りを明るくし、行き交う人達の足どりも軽い。ブランコの広場では清掃員の人達が溜まった落葉を掻きだしている。花の季節を迎える準備が着々と進んでいるよう。

コロナ蔓延の折から今日は出席者が四人である。「こんなこと珍しいなあ」とはいえ気心のしれた仲間ばかり、お喋りが止まらない。「人数は少ないけどいつもより賑やかやなあ」「来月は花見、もっと喧しいで」「コロナが収まらんとお弁当は無理かも」「それにしても私ら感染せんなあ、コロナも敬遠しとるんやろか」

好きな俳句を楽しみ、心許せる友との語らい。このひと時を大切にしたいと願って止まない。